

# 保育現場における特別支援教育の充実の方策に関する研究

保育者の悩みと研修・支援体制に着目して

○金川朋子

（四條畷学園短期大学 保育学科）

KEY WORDS: 保育者の悩み 研修 チーミング

## （目的）

令和 3 年 1 月の中教審答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」においても、「(3) 幼児教育を担う人材の確保・資質及び専門性の向上」として、②研修の充実等による資質の向上（中略）特別な配慮を必要とする幼児への支援」が示され研修の充実等が強調されている。さらに、特別支援学校の在り方として、幼児教育段階における特別支援教育を推進するためのセンター的機能の充実に資するような方策の検討が示されている。

本研究は、特別支援教育に関する保育者の困り感、現職研修の実施実態、ニーズ及び課題を明らかにし、保育現場における特別支援教育の充実に関する方策を検討することを目的とする。

## （方法）

本研究目的に基づき、本学近隣の保育・教育 122 施設の保育者を対象にアンケート調査（回収率 58.9%、回答数 575）及び、インタビュー調査を実施した。両調査では、基本的属性（所属、就業業種、保育・教育年数、所（園）内の体制、性別）、保育状況、保育経験、保育の支援体制、所内外研修状況について回答を求めた。実施期間は、2020 年 8 月～2021 年 1 月であった。

## （結果）

現在の障害児を受け入れ状況については、受け入れている 373（64.9%）、受け入れていない 167（29.0%）、無回答 35（6.1%）の結果であった。「特別な配慮を要する子ども」を担当した経験については、担当経験あり 365（63.5%）、担当経験なし 110（19.1%）、無回答 100（17.4%）であった。「特別な配慮を要する子ども」を保育する上での問題や悩みの有無は、全体で、375（65%）が問題や悩みを抱えている結果が得られた。自由記述で得られた保育者の問題や抱えている悩みについて、樋口<sup>1)</sup>が開発した計量テキスト分析用ソフト KH Coder3<sup>注2)</sup>を用いて分析した。抽出語のリストを作成した結果、問題や悩みの記述からの総抽出語の総数は 8,076 語で、そのうち助詞など一般的に用いられる語を除いた「抽出語」は、3,249 語、異なる語数 747 語であった。これらの抽出語をもとに、共起ネットワークによる分析、階層的クラスターによる分析、KWIC コンコーダンスによる確認により、検討を行った。

結果、保育者は、自身の知識不足を実感しながら、子どもに合った配慮ができていないのか、発達に合った関わりができていないのか、どのような言葉かけが適切なのか等、日々不安を感じ、悩みながら保育に携わっており、集団の中での育ちの保障、個々の特性の違い、集団活動の中で他児とどう関わるか、集団活動における個別の対応等にも苦慮し、保護者の理解を得るための伝え方、保護者との共通理解についても悩んでいることがうかがえた。

抽出語	名詞・動詞（上位 10 語）			
	名詞	動詞		
子ども	99	悩む	48	
集団	79	要する	24	
関わり	46	関わる	23	
知識	18	違う	21	
言葉	16	合う	21	
方法	16	伝える	15	
職員	14	感じる	14	
思い	12	思う	13	
個々	11	分かる	13	
自分	11	考える	12	

保育の支援体制として、巡回指導や外部との連携会議、所内会議の実施状況について質問した。巡回相談は 478（83.1%）で実施されているが、特別支援学校との連携会議は、399（69.4%）が実施していないことが明らかになった。また、所内における特別な配慮を要する子どもに関する所（園）内会議を実施していないという回答は 112（19.5%）であった。所外研修の参加実態は、全体（無回答を除く）では、参加 365（77.2%）、不参加 108（22.8%）であり、就業職種別参加実態では、正規雇用職員は 342（81.2%）が参加しているが、非正規雇用職員は、29（55.8%）が、参加していない状況にあり、カイ二乗検定を行った結果( $\chi^2(2) = 36.0, p = 0.001$ )、就業職種間の参加状況に有意な差があることが確認できた。希望する研修内容は、「発達障害のある子どもの保護者への対応」が 377（82.7%）、ADHD に関する具体的な支援方法・対応方法 368（80.7%）発達障害のある子どものいる学級内の他の子どもへの対応方法 368（80.3%）という結果であった。

## （考察）

保育現場では、多様な雇用・就業形態の保育者が保育に当たっている。保育者の悩みの中に、「職員全体でその子のことを理解し対応することが難しい」、「職員間の連携の難しさを感じることもある」、「自分の関わり方が適切なのか悩む」と言った記述があり、子どもの状況、発達課題、支援方法等々、職員間で話し合う事は重要である。エドモンソン<sup>2)</sup>は、今日の激動の職場では新たな考え方とあり方が必要であると述べており、チーミングという学習プロセスに関する研修の導入も、保育の充実につながるものになると考える。保育施設管理者は勤務時間・シフトの変更により研修機会の保障を行っている。知識不足に悩み、学びを求めている保育者、保育・教育施設へのサポートが求められており、大学教員等は、専門性を活かし、研修や現場での具体的な支援方法、対応の提供する必要があると考える。

特別支援学校との連携については、幼稚園教育要領にうたわれているが、門脇<sup>3)</sup>は、保育者の特別支援学校に対する抵抗感を指摘しているが、今後さらに、保育・教育施設と特別支援学校との連携の充実が求められる。

本研究は、一般社団法人全国保育士養成協議会 令和 2 年度学術研究助成を受け行った研究の一部です。

## （文献）

- 1) 樋口耕一（2014）社会調査のための計量的テキスト分析；内容分析の継承と発展をめざして、ナカニシヤ出版
- 2) エイミー・エドモンソン、チームが機能するとはどういうことか、英治出版（2014）
- 3) 門 脇ゆかり（2012）特別支援学校による幼稚園 E 保育所のサポートの在り方 ― 地域のニーズ、に合ったセンター的機能について ― 山形大学大学院教育実践研究科年報（3）、164-171、

（KANAGAWA Tomoko）